

学校通信

強い網

2015年10/11月号
 新版 第76号
 編集
 駿台甲府高等学校
 駿台甲府中学校
 駿台甲府小学校

これからの駿台甲府

中学・高校 校長 八田 政久

本年度がスタートして半年が過ぎていきました。各学校で様々な学校行事が順調に実施されております。「一日一生」という言葉がありますが、その日のその瞬間は二度と戻ってきません。児童生徒たちには、その瞬間を大切にしながら前を向いて歩んでほしいと願っております。

この4月から、多くの学校視察や様々な研修会に参加しました。今までの教師生活の中で、部活動を通し県内外問わず多くの現場の先生方とお付き合いさせて頂いていることが大変役に立っております。人と人とのつながりは何時の時代になっても大切にしなければならぬと痛感いたしました。ある県の伝統校の先生から、文科省の依頼による学校改革報告書をいただいたり、関東各県の名門校や進学校の先生から学校案内等を頂いたりしながら、本校が目指す「名門校」として取り組みなければいけないことや、進むべき道を検討しています。その中で特に興味を引いた研修会についてお話ししたいと思います。

・国際ハカロレアワークショップ

8月5日から3日間、東京学芸大学

付属国際中等教育学校で開かれました。国際バカロレア(以下IB)とは1968年ジュネーブを本部に、チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムです。世界の複雑さを理解し、そのことに対処できる生徒を育成し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入試資格(国際バカロレア資格)を与え、大学進学へのルートを確認することを目的としています。平成27年10月1日現在、世界140以上の国・地域、44校において実施されています。3歳から12歳を対象としたPYP、11歳から16歳を対象としたMYP、16歳から19歳を対象としたDPなどのプログラムがあります。国際資格なので言語は英語・フランス語・スペイン語で実施されていましたが、大学入学資格が与えられるDPにおいて2科目を除き日本語で実施できることになりました。このワークショップに本校から10名以上の教員が参加してきました。現在の各教科に加え、「課題論文(EE)」、「知の理論(TOK)」、「創造性・活動・奉仕(CAS)」も必修となっています。この研修を通して、すべてのIBプログラムは、国際的な

視野をもつ人間の育成を目指します。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。」というIBの学習者像を明確に理解することが出来ました。私は、昨今の教育界は目先のグローバル化にシフトし過ぎていくのではないかと思っています。IBの本質を学べば学ぶほど「グローバル語学」ではないかと思いましたが、3日間でも印象に残った言葉は「IBの教育は、本質的に全人的な教育です。」ということでした。

・全国私学リーダー研修

10月2日に広島県で行われた研修

会に参加しました。全国から私学のリーダーが参加し、パネルディスカッションやスパーグローバルハイスクール認定校である広島女学院中学高等学校を視察しました。私学の進むべき道を各学校が真剣に検討していることを肌で感じ、身の引き締まる思いをしました。

日本私立中学高等学校連合会会長であり富士見丘中高校の理事長校長である吉田晋先生と本会理事であり八雲学園中高校の理事長校長である近藤彰郎先生によるディスカッションで「アクティブラーニング」が最初に話題とされました。「アクティブラーニング」は生徒を主体とした課題発見型の共同的な学びですが、今までの教育で行われていなかったわけではありません。理科による実験や課題発表会など生徒が能動的に取り組む授業は私たちの時代から行われていた学習ではないでしょう

か? 「ゆとり教育」の時代に始まった総合的な学習を学識経験者がさらに進化させ新しい学びとして取り組ませようとしています。また、「グローバル化」は日本企業が世界から後れを取っていることの危機感から大学教育に降りてきているものであり、さらには高校現場へと降りてきています。高校教育の使命は、「十分な知識を身に付け、高等教育機関に送り出すこと」です。高等教育機関によって高校教育は大きく左右されてきました。高大接続による大学入試改革が大きな話題になっていますが、方向性が見えてきません。現在、ほとんどの大学でセンター試験を利用していますが悪い評価を耳にしません。確かな学力が測れないAO入試や推薦入試にむしる課題を指摘している企業や大学は多いのではないのでしょうか。

「○自主的にすすんで物事を学ぼうとする強い意欲と正しい態度を持つようになる。○相手によくわかるように、はっきりと話すことができ、また相手のいうことも、間違いなく聞き取ることが出来るようになる。○わが国に対する愛情を深め、そのよい伝統を保持し、伸張すると同時に、外国の人々の生活に対する正しい理解を持って、国際親善、人類平和の増進に努力する。」

以上は、昭和26年に文部省(現文科省)が出した教育の目標の抜粋です。

教育の本質は変わるものではありません。先に述べた高校教育の使命を小中学校に落とし込んでいきながら、これからも教職員一体となって研修を重ね、「名門校」を目指して進んでいきます。

中・高文化講演会

文化講演会担当 酒井 竜次(高校)

去る10月29日(木)、コラニー文化ホールにて、PTA文化部主催の「中高合同PTA文化講演会」が開催されました。今年度は



高校8期卒業生で、農業生産法人サラダボウル代表取締役の田中進氏をお招きし、「想いがカタチを創る」と題して講演いただきました。

長く金融業に携わっていらつした田中氏が、地元山梨で農業に関わっていく過程で得た、貴重な体験と教訓をお話いただきました。生徒たちも価値あるお話に大いに刺激を受け、ご講演後は氏も感心されるほどの鋭い質問も飛び出し、非常に有意義な講演会となりました。

ご来場いただきました保護者の皆さま、ありがとうございます。

中学生より ～講演を聞いて～

将来のことを考え始めている中学生にとつて、強い情熱で自分の道を切り開いている田中氏の話は学ぶところが多かったようです。感想を紹介します。

3年D組 渡辺 啓斗

この講演で学んだ一番大切なことは、可能性は無限大だということ。自分にはできないだろうというメンタルブロックが可能性を狭めている」と田中さんはおっしゃいました。確かに「や

つておけばよかった」と思うことはたくさんあります。その時は精一杯やったつもりでも、今思い返すと「精一杯やったつもり」というのは逃げるための言い訳でしかなかったのかなと思います。そしてもう一つ大切なことを学びました。「自分のやりたいことができないのは、創意工夫や情熱が足りないから。」これを聞いたときショックを受けました。自分には大好きなことをやっていて求める結果が出せなかった経験があったからです。大好きなことだから本気で頑張ったのに、それでも情熱が足りないと言われたんです。でもその時気づきました。本気で頑張ったというのも「つもり」でしかなかったと。あの時もっとやっておけばよかったと後悔の気持ちがいってきます。もう同じ後悔をしたくありません。これからは「自分ならできる」と思い、倒れるくらいまで努力を続け、自分の望む結果を手に入れたと思います。

3年C組 大西 未紗

講演を聴いて、自分が叶えたいと思った夢を一生懸命努力して叶えることの大切さを知りました。田中さんがサラダボウルを立ち上げたのは小さい頃からの夢ではなく、仕事を始めてからで、自分の歩んでいた道と異なる農業に進んだことは大きな驚きでした。今夢がなくても将来の可能性は無限で、もしかすると自分も社長になれるかもしれないと考えると興奮しました。田中さんの一度決めたら最後まで諦めない精神は、誰でも真似できるようなものではないと思います。会社を立ち上げる前の仕事も順調だったのに、地元の山梨で、

一から農業を始めることは普通の人ではできないことです。周りに批判されながら自分のやりたいことをやり抜いていることに感動しました。また質疑応答で、一番の売りは社員ですと答えたことが素晴らしいと思いました。皆が田中さんについていく理由が分かったような気がしました。講演を聴き、将来がとてもしみになってきました。

3年A組 姫野 友梨香

「農業で新しいカタチをつくる」農業で幸せになる」それがサラダボウルを設立したときに強く思ったことだそうです。小さい頃から、山梨という田舎に住んでいることや農家に生まれたことを恥じてきたという田中さん。しかし、大学卒業後金融界で活躍しているときに、山梨に戻って農業を始めようと思いいちちました。農業を始めるのはとても大変だったそうです。そんな状況の中でも、田中さんは諦めませんでした。農業というどうしてもやりた

いことを目の前にして、一生懸命頑張ったのです。そのことを聴いて、私は「想いがカタチを創るっていうのはこういうことを言うんだな」と思いました。そしていつか自分も「本当にやりたいこと」を見つけて、それに向かって努力を続け、田中さんのように頑張って人生を歩んで行きたいと思いました。



祝・芸文祭賞!!

(器楽・管弦楽部門)

高校 報告者 中村由美子

11月1日コラニー文化ホールで開催された芸文祭、器楽・管弦楽部門において室内楽同好会が芸文祭賞(第1位)を受賞しました。来年、7月30日から広島で開催される全国高等学校芸術文化祭に出場します。

出場参加校の中で、最少の編成(6名)でしたが、伸びのあるバイオリンの音色と今年度から参加した1年生のチェロのハーモニーが弦楽器ならではの演奏でした。

部長の青山舞(2年)さんは、ナレーションで、「会場の皆様にシューベルトの「Triö-Bühner-Duett」を聴いて、素敵な気持ちになってほしいと願って、込めて演奏をする」と語っていました。室内楽同好会では兼部をしているメンバーもいて、一緒に練習する時間も限られています。また、大会当日に行われる午前中のリハーサルは十数分程度。指揮者がいれば、最初の出だしに合わせる苦労はしませんが、指揮者なしの演奏なので呼吸を合わせるのは大変です。リハーサルから控室に戻ってきて、どうやったら出だしが合うか、部員たちで演奏しながら工夫を重ねていました。

本番は録音係で舞台裏で聴いていましたが、心地よい音に音楽の素養のない私でも聞き惚れていました。来年の高文祭に向けてより質の高い演奏になるよう願っています。

小学校 運動会

体育主任 齊藤 隆一

「赤組がんばれ!」「フレッ!フレッ!白組」「負けるな!青組」「行け!黄組」



自分たちの組を力いっぱい応援する4色の声が、九月二十日、快晴の空の下、小瀬スポーツ公園の補助競

技場に響き渡りました。

小学校の運動会も今年で十四回目。小学校のグラウンドから小瀬スポーツ公園の補助競技場に場所を移して四回目になります。来場者の数も年々増え、今年には二千人以上の方が運動会を見に来られました。児童や教員も含めると二千五百人も人が補助競技場に集まり、小学校の運動会に関わりました。

たくさんの方が集まると、はりきるのが駿小生。たくさんさんの声援を浴びて、本番は練習以上の素晴らしい力を発揮できた子がたくさんいました。

九月の運動会に向けて、一学期から4色の組に分かれ、縦割り活動をしてきました。一学年を赤白青黄の4つに分け、それが六学年分集まるので、各色、一く六年生までの百人強のチームが出来上がります。教員も4色に分か

れ、それぞれが自分たちのチームを盛り立てます。今年は、各色の色旗にメッセージを書き込み、オリジナルの応援旗を用意しました。(写真参照)

各色、応援団が選抜され、応援団が中心となってチームを鼓舞し、みんなで声をそろえて応援します。力の限り、本気で自分たちのチームを応援する姿が印象的でした。



また、運動会の花形と言えは「高学年の組み立て体操」です。昨今、新聞やニュースでよく耳にする大技「ピラミッド」ですが、見た目の美しさや達成感

から段数が多いものに挑戦する学校がある中、駿台甲府小学校では、危険性を考慮し、安全が確認できる範囲、決して無理が無い範囲に留め、その分、全体の流れの美しさや一体感を注いだのが、今年の大きなポイントです。天候不良等で、十分とは言えない短い練習時間の中、集中して取り組み、素晴らしい表現を見せてくれました。

運動会で培ってきた縦割り活動の結束は、これからも続きます。高学年の姿を見て「次は自分が。」という思いを強く持ち、この繋がりが素晴らしい形で継承され、伝統となっていくことを願います。

高校野球秋季大会ベスト4

野球部部长 奥山 昭隆

九月五日から開幕した第六十八回秋季関東高校野球山梨県大会で二〇〇〇年以来的の秋ベスト4進出という結果を残すことが出来ました。多くの皆様から応援をいただきありがとうございました。



初戦の山梨高校戦は四回までに5点のリードを奪い、6-3で逃げ切ることが出来ました。公式戦での

久々の勝利でした。

次の対戦相手は山梨学院大学付属高校で、新チームとなり初めて臨んだ夏の地区シ

ード戦で完敗した相手でした。かなり厳しい試合になることは予想していましたが、深沢新監督はいつもと同じ笑顔で球場入りしました。八回



が終わって1-2九回に1点追加され

ましたが、ここから「筋書きのないドラマ」が起

りました。2点差を撥ね返し、4-3のサヨナラ勝ち、選手も応援の皆さんも喜びで一杯でした。

準々決勝の甲府商業戦は五回を終えて4-1、その後追加点がなかなか奪えず、逆に九回まで危ない場面の連続でしたが、相手の反撃をなんとか2点に抑え、4-3でベスト4入りしました。



期待していただいた関東大会出場をかけた日本航空高校との戦いは1-8の八回コールド負け、力不足でした。



この冬、深沢監督を中心に練習に励み、来年も皆さんに応援していただき、喜んでいただける試合ができるむチームを目指します。ご期待下さい。

サニックスカップ

男子ハンド部部長 依田 純真

私たち駿台ハンドボール部は、引退した三年生が全国高校総体でベスト8という、歴代最高の記録を残してくれたおかげで、福岡県のグローバルアリーナで行われた『第8回サニックスカップU-17国際ハンドボール交流大会』に参加することができました。リーグ戦1試合目から、ユース中華台北代表との試合でした。結果は30対34で敗れてしまいました。その後の2試合も昨年度選抜勝校である北陸高校と一昨年度三冠の興南高校という強豪校と戦い、どちらも負けてしまい、リーグ四位となり交流戦に進みました。交流戦では地元の福岡選抜との試合でした。この試合も負けてしまい、結果は1勝もすることができませんでした。



先輩への感謝を忘れずに、生きていきたいです。

日本ユース選手権ほか

高校陸上競技部 顧問 三枝 幸雄

この10月は全国大会が目白押しでした。まず上旬の和歌山国体です。山梨代表として駿高では過去最高の5名が出場し、健闘しましたが、山梨の得点となる入賞はありませんでした。そして中旬の日本ユース選手権に男子の400mリレーと渡邊が100mに出場しました。まず100mで勢いをと、愛知瑞穂に乗り込みましたが、よもやまさかの途中棄権。お先真っ暗になりました。しかし400mリレーは急遽、新オーダー(辰巳、土屋、若杉、田中)で臨んで、予想以上の42秒00の好タイム。次につながるパスワークでした。そして、下旬に関東高校新人大会が群馬前橋でありました。一都七県の各種目上位3位までしか参加できません。入賞者0という残念な結果で終わってしまいました。沢山の課題を見つけて帰県しました。

その成果がどうかわかりませんが、11月3日の県グランプリファイナル男子100mで主将の若杉が10秒92と初めて11秒の壁を破りました。また1年の田中が11秒05、辰巳も11秒09と自己記録を更新しました。女子の秋山も12秒41の自己新で優勝し、この冬季練習に向けて弾みがつきました。

やるしかありません。冬に鍛え、「山梨」のまた「駿台甲府高校」の名を全国にとどろかすのです。小さな県、山梨でもやれば出来ることを皆の力で証明していきます。これからもご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

美術デザイン科よの

美術デザイン科 渡邊 成美

芸術の秋ということで、美術デザイン科では今まで以上に制作活動が盛んになってきました。

各ポスターコンクールや展覧会の応募が終わり、続々と受賞の知らせが入ってきています。芸術文化祭ポスター部門では3年の望月拓郎君が最優秀賞を受賞し、ポスターの図案にも採用され授賞式に参加しました。このポスター部門では優秀賞に3年の杉山智香さんが、奨励賞に同じく3年の加藤舞さんが受賞しています。望月拓郎君のポスターは県内の様々な場所で開催されているので、見かけることがあると思います。その際はぜひ細かい部分までじっくりとご覧になってください。

他にも、新聞などで取り上げられていた「望月春江賞展」では田中萌さんがロバートクラウダー賞、斉藤未季さんが優秀賞を受賞しました。一般の方も出品している展覧会なので、その中でも高校生としては大健闘だったと思います。後輩たちもいい刺激を受けたようで放課後一生懸命制作する生徒がとても増えました。現在1、2年生も11月11日に行われる芸術文化祭での受賞を目指し果敢に取り組んでいます。そのような日々の努力が結果につながるように最後の最後まで作品と向き合ってくれればいいなと思います。

また、毎年秋には「やまな



芸術祭ポスター部門 最優秀賞

し県民文化祭」が行われ、望月春江賞でも受賞した田中萌さんがF100号という大きな作品に初めて取り組み、入選を果たしました。一般の実力者が多く出品する大きな展覧会でしたが、よく頑張ってくれたと思います。本人なりに悔しい部分もあったようですが、その悔しさをバネに現在新しい作品に取り組んでいます。

他にも、ここ最近では珍しく4コマ漫画を出品し全国での受賞を果たした生徒もいます。「モラル・セキユリテイーコンクール」で2年生の岡田華歩さんが優秀賞に選ばれ、絵画やデザインだけでなく広い分野で生徒たちが活躍しています。

現在美術デザイン科では、芸術文化祭に出品する作品のほかに、美術デザイン科展に向けた制作に取り組んでいます。3年生は最後の、1年生は初めての美デ科展となりますが、今年是一年生のやる気や意欲が高く大きな作品に取り組む生徒が大勢います。今まで以上にどの作品に投票しようか悩んでしまう展覧会になるのではないのでしょうか？是非皆さん足を運んでください。